

## 中国と暫定合意

カソリック教会の法王庁（ヴァチカン）は昨年9月22日、中国内における司教任命をめぐる協議が暫定的な合意に達したと発表した。ヴァチカンと中国は、1951年に司教任命の問題で対立し、国交を断絶していた。その後も双方の見解が平行線をたどり、解決を見ないまま長い年月が流れていた。

ヴァチカンとしては、世界のカソリックの司教は全てローマ法王が任命すると主張を続けていた。それを中国は無視し、中国における司教は中国政府が決めるものだとしていた。中国政府が決めた司教を擁する教会は、正規の教会として中国政府の恩恵に浴していた。一方、中国政府が決めた司教を容認せず、ローマ法王が容認した司教のみを正規の司教と仰ぐカソリックの一派は、中国政府に認められず、地下に潜ることになった。

今回ヴァチカンが中国の主張を受け入れ、ヴァチカンの権威を投げうって、司教任命権で譲歩して暫定的に合意し、歴史的和解を遂げたことは、大変な驚きである。ヴァチカンは、ヨーロッパで、台湾と外交関係を維持している唯一の国である。中国は「一つの中国」という観点から、ヴァチカンに対して、台湾との外交関係を断絶するよう求めてくるだろう。中国はヴァチカンとの合意を全面的に、大々的に利用し、台湾問題の解決を目論んでいる。

中国では、未成年者の宗教活動を禁じる処置が広がっている。河南省では2018年9月より、教会の十字架を撤去させる動きも活発化している。河南省は、17世紀にカソリックが本格的に伝わって以降、現在も信仰の盛んなところである。ヴァチカンとしては中国政府に認められた教会と、それに異を唱えて地下に潜った教会とが、互いに協力して、信仰の火を灯し続け、発展させていくことを願っているようだ。さらに、ヴァチカン側は、中国への影響力を確保してこそ、中国人信者を守り、信仰を正常化できるとの立場を取っている。そこには信者拡大を図る意図も見取れる。

この状況下で、地下信者の心は大いに揺れている。ある信者は、「この暫定的処置は一方的に中国の処置が功を奏したようだ。」と述べ、また、別の信者は、「イエス・キリストの代理者である法王への服従は、信者が保ってきた教義の根幹だ。法王が中国との和解を望むなら、それに従うのが信者の務めである。」と述べている。

北京の雑居ビルにあるカソリック教会の神父は、中国とヴァチカンの関係改善を支持し、「時代の潮流であり、すべての信者がヴァチカンとともにありたいと願っている。現在の法王はそうした思いを理解している。教会は一つであり公認教会と地下教会の区別は無理だと思う。中国とヴァチカンの関係改善にも痛みが伴うだろう。」と述べる。また、中国当局の宗教に対する締め付けも厳しくなっており、ヴァチカンの歩み寄りが信者たちをかえって苦しめるとの懸念もあり、「地下教会の信者が犠牲にならないように公正な処遇が必要だ。中国大陸の現実にはいかに対処すべきかは、ここに生きている人間でなければ分からない。」と強調した。神父の最後の希望は、「教会は永遠に教会のものだ。強大な国家であっても文化を奪うことはできない」ということだ。

一方、台湾はヴァチカンとの国交断絶を心配している。現在台湾が外交関係を結んでいるのは、ヴァチカンをはじめとする17カ国で、多くはキリスト教国だ。ヴァチカンが一つの中国として、中国と外交関係を樹立し、台湾との関係を打ち切れれば、他の国々もヴァチカンに追随すると見られている。台湾は次のようなメッセージを出し、ヴァチカンと台湾との国交断絶はないと強調している。「ヴァチカンは我々に対し、今回の暫定的合意は政治、外交分野には及ばず、台湾とヴァチカンの76年に及ぶ外交関係に影響はないと重ねて表明した。」

ただ台湾側は、今後、ヴァチカンと中国の国交正常化に向けた動きが起こることを警戒している。台湾では、独立志向のある民進党の蔡英文政権が2016年5月に発足以来、中国からの圧力が強まり、これまでに計5カ国と断交に追い込まれている。**難民の扱い**

法王は12月16日のアンジェルス（お告げの祈り）で、難民についての国際条約が進展し、世界中のあらゆる機関で円滑に運用されることを求めた。これは昨年末、モロッコのマラケシュでの会議に集った164の国連加盟国の意思でもある。イタリアは、EUのオーストリア、ハンガリー、スロバキア、チェコ、ポーランドとともに欠席しており、この会議に出席したヴァチカンは、イタリアの欠席に遺憾の意を表した。ヴァチカンの秘書官ピエトロ・パロリンは「難民が呈する巨大な挑戦は各国代表団の貴重な話し合いによって、解決されるべきだ」と強調した。法王はクリスマスの演説で、ナザレのイエスの家族を引き合いにして、次のように胸の内を吐露した。「ナザレの聖家族は迫害の危機を感じた。そこで、神に導かれて、エジプトへ逃れた。小さなイエスは、今日の難民の半分が子供であることを思い起こさす。つまり、何も罪のない子供達だ。」

去年の暮れより新年にかけて、新天地を求めて、アフリカの港を出た難民を乗せた船がマルタ島で入港拒否にあい、また他のイタリアの港も内務大臣による閉鎖宣言を受け、行くあてがなく、2019年1月8日現在で16日間マルタ島の近くを漂流している（註：9日にマルタ政府によって受け入れが表明された）。この状況を憂慮して、法王は難民を助けるように各国に対して声明を発した。

## 苦しきヴァチカンの財政

世界の多くの宗教は財政難に悩んでいるようだ。裕福とされていたヴァチカンもその例に漏れない。ヴァチカンでは勤務者を解雇することはない。勤務者の数は4,500人に上る。ヴァチカンで人数が減ったのは、法王の教会改革を推進する諮問会議のメンバーの数だけで、9人から6人に減った。ヴァチカン去った3人はローレン・モンセンゴ・パジーニャ（79歳）、さらに老齢ということで、チリのフランシスコ・ハヴィエ・エラゼリス（85歳）、残りの一人がオーストラリア人で、祖国で児童性的虐待事件で裁判にかけられているジョージ・ペル（77歳）である。

費用が一番かさむのはやはり人件費だ。先述したように、解雇がないので、勤務者の自発的退職か定年退職を待つしかない。勤務者の年齢を見ると、これから5年、10年で多くの人が退職年齢に達するはずだ。その時になって、ヴァチカンの財政も根本的に見直す必要が生じてくるだろう。